

特集：新型MPV

20

新型MPVのデザイン Design of All-New MPV

大 矢 隆 一*1
Ryuichi Oya

要 約

Zoom-Zoomラインナップの締めくくりとなる新型MPVは、室内スペースや使い勝手などミニバン特有の「機能的価値」を維持進化させながら、アスレチックで革新的なスタイルによる「エモショナルバリュー」をも提供することが求められた。そこでデザインはパッケージ&プロポーションの革新から取り組み、快適な人間の乗せ方と適切な空間の定義付けからスタートした。その上でマツダらしいスポーティ表現とターゲットカスタマーの趣向にかなった上質感のあるデザインテイストを融合し、スポーティで存在感のあるエクステリアと、見識のある大人の期待値に応える上質なインテリアデザインの実現を図った。

Summary

Filling up a final slot of Zoom-Zoom lineup, all new MPV took up a task of providing “emotional value” with its athletic and innovative styling while maintaining “functional value” such as interior space and ease of use that is unique to mini van. Design team started from package & proportion innovation, defining comfortable occupant’s position and appropriate space for them. Combining Mazda-like sporty expression and customer-oriented high quality design taste, we created prominent sporty exterior and high quality interior that can live up to sensible adult’s expectations.

1. はじめに

ミニバンというカテゴリが日本市場の中で拡大定着する一方で、多くのミニバンユーザが「家族の満足」のためにという理由で「運転の楽しさ」や「所有することの誇り」等、クルマ本来の喜びを忘れつつあるのではないか。

Zoom-Zoomラインナップの完成形となる新型MPVのデザイン開発にあたって、家族のためだけに購入する広さと機能のみの道具的なミニバンではなく、そのような基本機能を押さえながらも「オーナー自身が所有することを誇れる存在感のある車作り」にチャレンジした。

2. デザインの狙い

デザイナーは車のデザインを「プロポーション」と「テイスト」という2つの側面に分けて考えることが多い。筋トレやダイエットによる理想の体型を作り（プロポーシ

ョン）、どのようなファッションを身にまとうか（テイスト）という我々の日常の行為にたとえると理解していただきやすいかと思う。

新型MPVのデザイン開発も

- (1) 商用バンのイメージから脱却した次世代MPVにふさわしい新しいプロポーション作り
- (2) 先代MPVよりもより高品質であり、時代とターゲットカスタマーの趣向に即したデザインテイスト表現という2つの側面で進めた。

2.1 パッケージ&プロポーション

俗に「スタイルのよい人は何を着ても似合う」といわれるように、グッドデザインの基本はグッドプロポーションにある。革新的なプロポーションを作るために、ただ単に「バランスがいい」というのではなく、理想的な乗員の乗せ方（=パッケージ）からデザイン作業はスタートした。乗り降りしやすい「低いフロア」をベースに、乗り心地

*1 デザイン戦略スタジオ
Design Strategic Studio

を考慮して「前輪と後輪の間」に3列6人を「快適な着座姿勢」でレイアウト。それを先代MPV並の室内高をキープした「伸びやか」なキャビンに包み込むことで、次世代ミニバンと呼べる革新的なプロポーションが見えてきた。

ロングホイールベース&ショートオーバハング。タイヤをボデーの4隅に配置した、安定感と伸びやかさのある美しいプロポーションにより、快適な室内空間と視覚的な存在感を高度に両立した。ロングホイールベースはデザイン的效果だけでなく、大開口スライドドアとセットで3rd席へのダイレクトアクセスを可能にした (Fig.1)。

「たくさん荷物を積める」というような単純な広さではなく、「まず人を快適に着座でき、その上で適切な空間を与える」という発想から作られたパッケージ&プロポーション。これがデザインの出発点になっている。

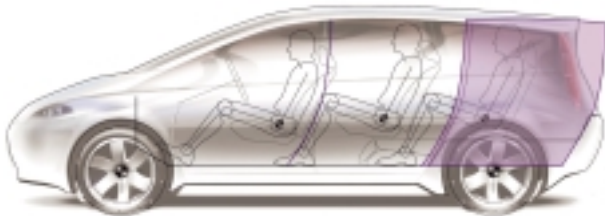


Fig.1 Package & Proportion Image

2.2 デザインテイスト

メインとなるデザインテイストは、マツダのデザインDNAであるAthletic Designをベースに、オトナの趣向&時代性を考慮したシンプル、クリーン&モダンテイストを加味したものに設定した。更に、カスタマーに対して魅力あるデザインテイストを提供するために「デザインテイストサーベイ」を実施した。これは「ホームオーディオ」「ソファ」「自転車」「靴」等の日常品において、それぞれデザインテイストの異なる複数案の中からターゲットカスタマー（30代男性）がどれを好むかを調査することにより、彼らの趣向の傾向を知るものである。その調査の結果、「シンプルで上質」と「スタイリッシュでスポーティ」の2つの方向性をカスタマーが欲していることが見えてきた。

そこでパーツやカラー&トリムでは「上質」と「スポーティ」をキーワードに2種類の異なるデザインテイストを展開することで、一方的なテイストの押し付けではなく、カスタマーの趣向に沿って好みのテイストを選んでいただけるよう配慮した。

3. エクステリアデザイン

前述したように、単なる広さではなく乗員の快適性から生まれた新しいプロポーションに、モダナイズされたAthletic表現をアレンジしたエクステリアデザイン。伸びやかなキャビンと力強いボデーから作られた美しく存在感のあるプロポーションと、厚みのあるフロントフェイスと

ダイナミックな縦型ヘッドランプから構成される「威風堂々」たるフロントフェイスが最大の特徴である (Fig.2)。



Fig.2 Front View

走りを予感させる力強いホイールアーチによりマツダらしさを明確にアピール。リヤホイールアーチの外側にオーバハングするスライドドアを採用しながらここまで大きなホイールフレアを実現するためには、ドアのスイング量の増大とドアトリムの適切な厚みの吟味など、インテリアデザインにまで検討範囲を広げることが要求された (Fig.3)。



Fig.3 Side View

リヤビューは商用バンのようなイメージからの脱却を狙っている。横長リヤコンピランプとリヤバンパと連続感のあるガーニッシュをリフトゲートに追加することで、ワイド感にあふれ、バンパとの段差のないすっきりと引き締まったリヤビューを実現することができた (Fig.4)。



Fig.4 Rear View

ランプのディテールデザインは、従来のような円形モチ

ーフとは異なる新しい構成にチャレンジした。

フロントヘッドランプは長方形と半円形から構成されたユニークな灯体を上下2段に前後位相差を加えてレイアウトした立体的でダイナミックなデザインとしている。

リヤコンビランプにはヘッドランプ同様の造形モチーフを用い、透明インナレンズの表裏両面に造形処理を施した。これによってジュエリーのような立体感とクリスタル感を表現している。いずれもハイテク感とモダンさが融合された質感の高い仕上がりになっている (Fig.5)



Fig.5 Head Lamp(LH)& Rear Combination Lamp(RH)

デザインテイストサーベイの調査結果に基づき、エクステリアデザインには、上質でモダンなたたずまいの「Modern Appearance Package」とマツダのZoom-Zoomを表現したアクティブでスポーティな「Sports Appearance Package」の2種を設定。Lowグレード、Highグレードという概念を超えた2つのアピランスをカスタマーに提供している。

3.1 Modern Appearance Package

まずModern Appearance Packageは、光沢のあるブロックパターンのフロントグリルにメッキパーツを組み合わせ、上質でモダンなフロントフェイスを作り出している。

サイドシルなどボデー下端部全周をブラックアウトすることでボデー全般をスリムに見せ、全体的に軽快な印象を作り上げた。リヤコンビには赤色インナレンズとメッキのコントラストを強調し上質感を強調した (Fig.6)



Fig.6 Modern Appearance Package

3.2 Sports Appearance Package

一方Sports Appearance Package (以下SAP)は、フロントグリルはハニカムメッシュ+スリット付き横バーをモチーフにし、より立体的なバンパデザインと力強く大きなバンパエア開口で、アグレッシブかつスポーティなフロントフェイスを実現している。

サイドシルガーニッシュなど、ボデー下端をボデーカラー化することで低重心感と安定感を強調。フォグランプと同じメッキ調サイドシルモールディングは先代MPVのSAPが築いた強烈なイメージを、質感を上げながら継承した。

リヤルーフスポイラを装着することで、空力効果はもちろろんプロポーションの伸びやかさも強調した。リヤコンビランプもSAPではクリアタイプに変更し、ハイテク感とスポーティさを強調している (Fig.7)



Fig.7 Sports Appearance Package

3.3 ホイールデザイン

3種類の新デザインアルミホイールは、マツダらしい15本スポークをモチーフにしなが、ボデーのボリュームに負けないよう大きく見えるデザインを採用。なおかつそれぞれが明確なテイストの差を表現している。

- (1) 18インチ：ライトウェイトイメージと力強さが融合したアグレッシブでスポーティなデザイン。ボデーのリヤビラ形状と共通のモチーフを採用したスポーク付け根の処理は、車全体の中で心地よいアクセントとなっている。
- (2) 17インチ：細めのスポークに柔らかな面変化を加味して、上質でエレガントな印象に仕上げた。
- (3) 16インチ：太さの違う2種のスポークを立体的に交差させることにより、スポーティさとモダンさを融合。

またフルキャップのデザインも、無機的なテイストで構成し、力強さとモダンな新しさを狙った (Fig.8)



Fig.8 Alloy Wheel & Full Cap Design

4. インテリアデザイン

デザインコンセプトは、商用パニック的な単なる広さではない「上質で快適な室内空間作り」である。更には従来の汗臭いスポーティではなく、オトナの上質なスポーティドライブをサポートするインテリアデザインを目指した。使用シーンのイメージとして「試合を終えたアスリートがスーツに着替えてドライブ」を合言葉にし、開発メンバー全員が共通認識を持てるようにした (Fig.9)。



Fig.9 Interior Image Sketch

限られた空間の中で「マツダらしいスポーティなドライブシート」と「MPVとしての開放感」という、一見相反するようなこの要素を両立するために、パーツを軽く見せるフローティングイメージ処理を効果的に配し、スポーティな緊張感と心地よい開放感の両立した室内空間を実現している。

インストルメントパネル (以下インパネ) のデザインは水平基調で広さ感を強調。更にインパネアッパ部を独立してフローティングしている「ウイング」に見立て、その下を空気

が抜けていく...、というような開放的で風通しの良さを感じさせる「Airyな空間」をターゲットイメージとした (Fig.10)



Fig.10 Instrument Panel Image Sketch

フローティングイメージを物理的に表現するのが困難な部位には、造形表現に加えて視覚的に表現するため「光による立体表現」という手法を採用している。

ウイング下部にLEDと導光棒による間接照明を仕込み、夜間はウイングがあたかも浮かんでいるような見せる効果を実現した。また3Dブラックアウトメータと称した新構造のメータは、虚像を使ってメータ指針&文字盤も3次元的に浮かんでいるように見せている (Fig.11)。

これらはいずれも単なるギミックではなく、すべて圧迫感のない「Airyな空間」を視覚的に実現するためのものである。



Fig.11 3D Blackout Meter

ミニバンにおける装着比率が増大しつつあるナビゲーションシステム類は、ドライバーから見やすくタッチパネル操作も容易にできる位置にレイアウトすることはデザイン開発の早い段階で決定した。このように操作性を重視する一方で、直線と円だけで構成されたモダンなデザインの空調パネルは、開放的なダッシュボードデザインの中における新鮮なアクセントとなっている (Fig.12)。



Fig.12 Instrument Panel (Virtual Model)

一部の機種には部分的にウッド風パネルを採用。ウッドも従来の「木目」ではなく「シンプル&モダン」をコンセプトとしてセレクトした。またウッド風パネルの横には必ずメタル調素材をコーディネート。「ウッド&メタル」という素材のコンビネーションにこだわり、モダンリビングのような上質感を再現している (Fig.13)。



Fig.13 Wood & Metal Combination

インテリアもエクステリア同様2つのデザインテイストで、より広いカスタマーの嗜好に対応している。

「上質&洗練」を訴求する「High Style」と、マツダらしいSporty Drivingを演出する「Sports Style」の2種で、いずれも専用のシート形状とカラー&トリムを設定している。

4.1 High Style

単なる「豪華」「高級」という概念ではなく、見識ある大人のための洗練された上質なインテリアがHigh Styleの狙いである。インパネアツパとフロアには新色の「ダークブラウン」と、インパネアツパに「サンドベージュ」を配した2トーンの内装色により、コントラストのある質感の高い空間を演出。更に上級グレードの加飾には従来に見られるトラッドな柄ではなく、シンプルながら繊細な柄の茶木目を採用し、新しい上質さを表現した (Fig.14)。



Fig.14 High Style Interior

シートは縦基調のデザインにモダンな柄と上質な触感のファブリックを採用し、シートはあえて薄く見える座面と背面の2トーンのトリムパターンを採用。フロアマットのダークブラウン色とあいまってモダンで快適な薄型シートが、あたかも室内に浮かんでいるような雰囲気を作り出す。これもまた「Airyな空間」作りにも貢献している (Fig.15)。



Fig.15 High Style Seat Design

4.2 Sports Style

Sports Styleは、ブラック内装色とシルバーパーツのコントラストでスポーティさと上質さを合わせ持つ空間を演出した。シートはサイドボルスターを強調しホールド性を高めたスポーツタイプシート。カーボンファイバーをイメージさせる立体的で力強い柄のファブリックで、洗練されたスポーティテイストを表現している (Fig.16)。



Fig.16 Sports Style Interior

5. ボデーカラー

「上質」と「スポーティ」の2つのテイストへのこだわりはボデーカラーパレットにも反映されている。

「上質～High Style」イメージを表現するのは新色のコスミックブラックマイカに代表される4色 (Fig.17)。

「スポーティ～Sports Style」は大人のためのレッドともいえるカッパーレッドマイカを含む3色 (Fig.18)。

上記に白・シルバーという定番のニュートラルカラー2色 (Fig.19)を加えた全9色で、ターゲットカスタマーの幅広い趣向に対応している。

特にコスミックブラックマイカとHigh Style内装のコンビネーションは、「所有することを誇れる存在感のある車」というメッセージを最も表現している象徴的なカラーコーディネートといえる。



Fig.17 Modern Image Colors



Fig.18 Sporty Image Colors



Fig.19 Neutral Colors

6. おわりに

ミニバンの基本要件である室内スペースや使い勝手の良さと、マツダならではのアスレチックでスポーティなデザイン。一見相反するような2つのニーズをひとつに纏め上げることができたのも、Zoom-Zoomスピリットのもと「マツダのミニバンはこうあるべきだ」という明確なイメージが開発メンバ全員の中に宿っていたからではないか。

ミニバンブームの中で家族の満足のみを重視しすぎるあまり、忘れかけていた「車を所有することの喜び」や「運転することの楽しさ」。これらをこの新型MPVで今一度思い出していだきたいと思う。もちろん家族の幸せを失うことなく、である。

著者



大矢隆一